



### 「明治の大宰相」の真実を明かす

作家 桐野 作人

幻の稀覯本が復刻されると知り、胸が高鳴っているといえは、大げさに過ぎるであろうか。古書数寄では人後に落ちぬと自負する者ながらも、この本の高名にもかかわらず、これまで一度として古書市場で見かけたことがなかった。刊行されたのが明治末年と二世紀近くも前で、その後、ほとんど重版や復刻されることがなかったかららしい。

この本は大久保甲東をよく知る家族・朋輩・同僚・部下といった人々の証言を詳しく収録したものである。たとえば、三人の実妹や子息の利武・牧野伸顕氏が青少年期や家庭人としての甲東を生き生きと語っているかと思えば、郷里の後輩の軍人高島鞆之助は甲東と西郷南洲の今生の別れ際の秘話を語る。甲東の右腕で郵便事業の父として知られる前島密は紀尾井坂遭難直後の息を呑むような凄惨な現場をじつに生々しく証言する。米沢藩家老の出の官僚千坂高雅は紀尾井坂遭難後、大久保家には二万円の借金しか残っていなかったとその清廉潔白を強調するという具合である。余談ながら、千坂は黒田清隆夫人の死の疑惑についてもまことに興味深い証言を残している。なかでも白眉は、元外務大臣林董の「大久保は明治年間の唯一の大宰相」という評言で、まことに正鵠を射ていると思う。

この本の証言者を見ると、鹿児島出身者が少なく、他藩・他県人が多いことに気づく。ことに旧幕府や「賊」とされた諸藩の人士が少なくない。ここに新国家建設のためには党派や藩閥にこだわらず公平無私を信条とした甲東の真骨頂が期せずして顕れていよう。

私事ながら小生も薩摩産で、西郷・大久保の逸話を聞かされながら育ち、一部血肉化している。しかし、維新の両雄と称されながらも、甲東の銅像建立が南洲のそれより四十数年も遅れたことに象徴されるように、その不人気に歯がみした一人でもある。現代日本の混迷を見るにつけ、甲東の業績を振り返る必要が痛感される昨今、その実像と真実を伝える伝記の復刻を心から喜びたい。

大隈重信伯序

報知新聞記者

大久保利武氏閲

松原致遠編

# 大久保利通

甲東公に親炙せる二十餘氏の談にかゝり、公私両面の公の眞面目茲に始めて明か也。單に興味饒かなる讀物たるのみならず、實に高貴なる維新史料たり。

新潮社藏版

マツノ書店 限定三百部(番号入)復刻

▼昭和五十五年若干部刊行された本書の復刻版には、歴史学者大久保利謙氏の解説や、初版に未収録の記事を集めた補遺編が「別冊」として新たに添付されました。

▼今回の復刻に際しては、初版とその「別冊」を一冊にまとめ、更に版面をB6判からA5判に拡大しました。

▼今回は予約締切後に印刷を開始しますので、もし予約数が三百部を超えても、予約分だけは確保できます。但し余分は作りませんので、必ず締切日までにご注文願います。

■体 裁 A5判三三二頁

上製クロス装箱入

■定 価 六千円(税込・千450円)

■予約特価 五千円(税・千共)

■特価締切 平成15年6月末

■発 売 8月上旬

■限定三百部復刻(番号入)

▼「維新史籍解題」と両方の場合、千円引き。

▼直販につき、書店不卸。

周南市銀座二の二三 マツノ書店

電話 0954-22-3540

## 第二章 公の忠誠

米田 虎雄男談

髪初めて断

大久保さんの事に關しては、私は人の知らぬ事を少しは知つて居る。まだ人が頭の髪を截らぬ内、大久保さん一人断然切つて朝廷へ出られた。これが断髪して朝廷に出たはじまりだが、大久保さんの此の英断には皆が膽をひしがれた。畏れながら陛下もそれから十日許りして御髪をお断り遊ばされたし、下々の者もこれに倣つて切つたといふ次第だ。先日伊藤公の一週年祭に其事を話したら、皆がそれは珍らしい話だと言つて居た。牧野男爵すら初耳であつたらしい。

直接私が公から話を聞いたり見たりした事で最も感服したのは、私がまだ

## 公の忠誠

▲凶変前の悪夢 紀尾井町の変のあつた三、四日前の晩、何であつたか相談する事があつて大久保公の屋敷へ行つた。一緒に晚餐を食べて居たら、「前島さん私は昨夕変な夢を見た。何でも西郷と言ひ争つて、終ひには格闘したが、私は西郷に追はれて高い崖から落ちた。脳をひどく石に打ちつけて脳が碎けてしまった。自分の脳が碎けてピク／＼動いて居るのがアリ／＼と見えたが、不思議な夢ではありませんか」といふやうな話で、平生夢の事などは、一切話されぬ人であつたから、不思議に思つて居たが、偶然かどうか二、三日にして紀尾井町の変が起つた。

▲碎けた脳が動く その日は太政官に緊急な相談事件があつて、皆が早く出かけた。皆が出揃つても大將一人見えない。大変遅いが何うしたのだからと言つて居たら使が来て、今大久保公が紀尾井町で刺客の手に倒れたと報らして来た。私は直ぐに駆けつけた。公はまだ路上に倒れたまゝで居られたが、躰は血だらけで、脳が碎けて、まだピク／＼と動いて居た。二、三日前に親しく聞いた公の悪夢を憶ひ出して慄然とした。

目次

維新前の公

第一章 少年時代

石原きち子 山田すま子 石原みね子 山陽の所謂健児社少年時代の遊戯 子供の頃のあはれ方 無類のきかんぼう 三里の山登り 鳳徳先生 少年時代の友人

第二章 青年時代と藩政時代

一 松村淳蔵 陽明学を学ぶ 血氣時代の公 参禅 福昌寺 ハイカラの大西郷 斉彬の信任 夷人は膝が曲らぬ 維新史上の秘事 パークス公に尽す 藩政大改革 三島総監が地頭 二 石原きち子 山田すま子 石原みね子 高崎くづれ 父君遠島 父君遠島中の苦難 三両の借用証 家政の困難と国事の奔走 当時の勤王党 碁を以て藩侯に近く 薩藩勤王の萌芽 若い時からの派手嫌ひ 天下取りの人相 西郷の威望 斉彬公の

遺志全し 三日間の神仏礼拝

第三章 国事奔走時代

一 錦の御旗 山本復一 私公 岩倉暗殺の密謀 両雄肝膽相照 戊辰戦争中の御所 二 東湖・南洲・甲東 米田虎雄 薩藩継嗣問題 斉彬公の遠見 西郷殉死の志 一見して異相の人 瘦せぎすな大西郷 大事を語るべき者十三人 三 西郷と耦死せんとす 松村淳蔵 西郷党と中山党 耦し違へて死なう

維新後の公

第一章 内治の苦心

一 内治の方針 河瀬秀治 民業の発達を主とす 二 三百万円 速水堅曹 公と五代 友厚 ピシリと叱られる 既に勅が出た！ 各省の大改革 秘中の秘事 三 殖産興業 佐々木長淳 公洋行後の勸業熱 専門家以上 先見の明 情理並び到る 公死後の殖産興業 四 公の格言 高橋新吉 過ぎたるは及ばざるに如かず

一利を興すは一害を除くに如かず 公容易に書かず 公の遺志

第二章 公の忠誠

米田虎雄 初めて断髪 元田永宇を推薦す

第三章 公の威望

千阪高雅 黒田伯夫人蹴殺し事件 岩倉邸の内閣会議 大木司法卿は否認 大久保の一言 群議摺服

第四章 部下に対する公

一 千阪高雅 藩閥心なし 私情に殉ぜず 前原一誠の乱の際 どうも久しかつた 伊藤侯感涙を流す 二 高橋新吉 礼儀の正しかりし人 故伊藤侯の実話 山本大将の閉口 寡黙にして峻厳 『それだけですか』 無駄口は言はぬ 三 河瀬秀治 大久保内務卿と伊藤内務卿 珍しき立腹

第五章 欧米巡遊中の公

一 久米邦武 伊藤副使 葉巻煙草好む ニコニコ笑ひ 公の皮肉 生涯の珍事 公の感慨 引退の志 仏国大統領

感服す 二 佐藤進 衣冠束帯 静閑の一室に起居 一個の髑髏 公の健康診断

第六章 佐賀陣中の公

米田虎雄 自ら出征 古荘嘉門公の先見肥後に事無からしむ 弾雨の中を平然として行く 公の沈勇 近衛兵の暴動 朝臣中第一の沈勇 従容として死生の間を行く

第七章 北京談判中の公

一 小牧昌業 北京談判当時の隨行者 北京談判の起因 公の旅館 外交談判の調子 両弁の便法 公の要求 大事来りて顔色変せず 英公使の仲裁 北京条約 自ら大事に任ずる力 公の冗談口 公の詩 台湾行 国旗を掲げて公を迎ふ 二 田辺蓮舟 対米問題 大臣の威重と器局

第八章 木戸と大久保

一 河瀬秀治 薩長連合の楔 子 三條岩倉との関係 二人の公明正大 両雄の間柄 征

大久保公雑話

第一章 公と家庭教育

台論に於ける両公の反目 木戸憤憂す 二人の扞格 質素なる当時の生活 後進付随す 木戸の憤死 国家の中心大久保公に移る 二 佐藤進 バラック病院の嚆矢 大久保公の威容 行在所の光景

一 牧野伸顕 非常の子煩悩 会食と碁が娛しみ 大真面目 二人 公と農科大学 二 大久保利武 家庭に於ける公 晩餐時の団欒 令妹に百両宛遣る 公の書簡

第二章 教育の苦心

高橋新吉 子息の教育に腐心 牧野男の少年時代 子女皆人物となる 家庭の平生 始めて泣く

第三章 故公雑話

石原きち子 山田すま子 石原みね子 父君と母君 朝風呂 喘息が持病 大の好物 蕪の三杯漬 近衛公との打合 手紙の書き振り 大抵洋服

大久保公論

第一章 新日本の創設者

大隈重信 天成の偉器 青年時代の境遇 阿部伊勢守の感化 西郷と久光との関係 岩倉と三條との関係 薩長の関係 二十年間の大苦辛 僅かに八ヶ月志を舒べて斃る

第二章 明治年間唯一の大宰相 林董 明治唯一の大宰相 其人直に国家の柱石新国家の建設 付録 大久保公年表

補遺編

大久保公 昵近諸家の実話 大久保公懐旧談 前島密 大久保公雑話 松村淳蔵 清廉なる公 千坂高雅 大久保公と伊藤公 速水堅曹 大久保公雑話・洋行中の公 久

解説

談話者の経歴 山田すま 石原みね 松村淳蔵 山本復一 米田虎雄 前島密 河瀬秀治 速見堅曹 高橋新吉 千坂高雅 久米邦武 佐藤進 田辺蓮舟 小牧昌業 高島勲 之助 松平正直 牧野伸顕 大久保利武 大隈重信 林董







## 本書はまさに唯一の 「実話大久保利通伝」である

大久保利謙

本書は、大久保利通関係の文献として、まず他にかけがえのないといつてよい価値をもっている。というのは、大久保の生前直接親炙し、または下僚として仕えた人々、それに実妹、子息たちの近親者を編者が、一人一人歴訪して聞きとつた実話、情味ゆたかな憶い出を集めたものだからである。

この書は、『報知新聞』紙上に「大久保公」という表題で、明治四十三年の十月から四十四年の一月まで、八十回余にわたつて連載されたものであるが、この明治四十三年といえは、大久保遭難の三十年後で、今日からは、もはや七十年以上の昔となるのでその頃にはまだ、大久保に生前親しく接した人々がお沢山生存しておられた。そこでその生々しい憶い出を聞くことができた。

本書はまさに実話大久保利通伝である。談話者が明治末年までの生存者なので、第二部「維新後の公」がページ数も多く、かつ充実している。とくに内務卿時代は、官僚または政治家としての大久保の人柄や姿勢がよくでていて面白い。米欧巡回中については久米邦武と田辺蓮舟、北京談判には小牧昌業など、それぞれ随員たちの生々しい実話、珍談がある。このほか三実妹、次男牧野伸顕、三男大久保利武の追懐談は、家庭人としての大久保を伝える唯一の記録といつていい。

大久保利通に関する逸話のたぐいは、いろいろ伝えられているが、直接に接した人々の実話となると案外少ない。勝田孫弥編の『甲東逸話』（昭和三年刊）などが利用されているが、これも諸書からの寄せ集めで、本書からもかなり採録されている。それに比べると、本書はまごうことなき実話を系統的にとめたもので、唯一の正確な実話大久保利通伝といえるものである。

ところが、この書は明治四十五年五月、新潮社から出されたまま重版もされず久しく版を絶っている。国立国会図書館、また鹿児島県立図書館にも蔵本がなく、そのうえ古書市場にもほとんど姿を見ない文字どおり幻の本といふべき希本である。

今回復刻するに当つて『報知新聞』掲載の「大久保公」から漏れた十一編を補遺として追加して完璧を期した。（本書、昭和五十五年「復刻版」補遺編より抜粋）